

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 8 月 15 日現在

機関番号：24506

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25862241

研究課題名（和文）精神疾患をもつ人々を対象とした、ポジティブな心理的変容を促す看護プログラムの開発

研究課題名（英文）A study how benefit finding can be facilitated among people with mental illness

## 研究代表者

千葉 理恵 (Chiba, Rie)

兵庫県立大学・地域ケア開発研究所・准教授

研究者番号：50645075

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：ベネフィット・ファインディング促進に関する先行研究の知見を整理した結果、認知行動療法・ポジティブ心理学の理論を包含する介入が有用である可能性が示唆された。本研究はまた、精神疾患をもつ人々におけるベネフィット・ファインディングの関連要因を検討した。さらに、日本語版Recovery Attitude Questionnaire (RAQ)の信頼性・妥当性を検討したところ、良好な妥当性が示されたが、信頼性は十分ではなかったため、今後のさらなる検証が必要であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：In this study, a literature review regarding how benefit finding can be facilitated was conducted. It showed using cognitive-behavioral therapy and some interventions based on positive psychology may be useful. This study also explored the relationship between several variables and benefit finding among people with mental illness. In addition, the reliability and validity of the Japanese version of the Recovery Attitude Questionnaire (RAQ) was examined. Reasonable validity and unsatisfactory reliability were revealed. Further large-scale research is required to ensure robust verification.

研究分野：精神看護学

キーワード：ベネフィット・ファインディング リカバリー 精神疾患 精神看護学

## 1. 研究開始当初の背景

様々な疾患やトラウマティックな出来事を経験した人々の心理に関するこれまでの伝統的な研究は、苦痛や困難などのネガティブな変化に焦点をあてたものが主流であった(楠永, 山崎, 2002)。しかし近年は、ネガティブな影響だけではなく、それらへの対処や適応努力を通じた成長の過程やポジティブな変化が着目されるようになってきている(Helgeson et al., 2006)。

慢性疾患などの逆境を経験した人が、その経験に対処する過程を通して得られたものや学んだことがあったと感じることを「ベネフィット・ファインディング (benefit finding)」という(Tennen & Affleck, 2005)。先行研究からは、様々な身体疾患をもつ患者や逆境を経験した人々は、多彩なベネフィット・ファインディングを経験しうることが示されている(Oxlad et al., 2008)。また、研究者らが行った過去の研究からは、精神疾患をもつ人々が経験しうるベネフィット・ファインディングには、「人間関係の深まり・人間関係での気づき」、「内面の成長・人生の価値観の変化」、「精神の障害や治療に関する知識の増加」、「健康関連の行動変容・自己管理」、「社会生活の中で新たな役割を見出すこと」、「宗教を信じること」などがあることが明らかになっている(千葉, 他, 2010)。

ベネフィット・ファインディングは、疾患や逆境への効果的な対処や適応を促進し、well-beingの向上や身体機能の改善にも寄与するものであると論じられている(Luszczynska et al., 2007; Tennen & Affleck, 2005)。そのため近年欧米を中心に、ベネフィット・ファインディングやその近接概念を評価する尺度が多く開発され、ベネフィット・ファインディングの関連要因に関する量的な検討が行われている。また、欧米ではベネフィット・ファインディングを促進する介入方法に関する研究が行われてきている。

わが国においてはそうした研究はまだ少なく、ベネフィット・ファインディングの関連要因や促進方法は明らかになっていない。一方で、精神疾患をもつ人々を対象にした研究において、ベネフィット・ファインディングは、リカバリー(精神疾患をもつ人々が、たとえ精神症状は続いていたとしても、人生の新しい意味や目的を見出して生きていく主観的概念)と密接に関連することは明らかになっている(Chiba et al., 2011; 2014)。精神疾患をもつ人々のリカバリーを促進するためには、精神保健サービスに携わる人々が、リカバリーへの知識や理解を有していることが重要であると論じられている。

精神疾患をもつ人々のベネフィット・ファインディングを促進する方法を検討するためには、先行研究のレビューを行い、知見を整理することや、これを評価しうる質問票を

用いて関連要因を検討することが必要であると考えられた。また、精神保健サービスに携わる専門職者を対象に用いることができる、リカバリーへの知識・考え方を評価する尺度を作成することが、その一助となると考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究は、1) ベネフィット・ファインディング促進に関する先行研究の知見を整理し、これを促進する介入について検討すること、2) ベネフィット・ファインディングの関連要因を検討することを目的とした。さらに、3) 過去に行った調査データにより、リカバリーへの知識・考え方を評価する日本語版 Recovery Attitude Questionnaire (RAQ)の信頼性・妥当性を検討することを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) ベネフィット・ファインディング促進に関する先行研究の文献レビュー・介入プログラム作成に関する検討

データベースは PubMed (2000年1月～2014年5月)を用い、キーワードは "intervention " AND "benefit finding"として検索を行った結果、26文献が該当した。対象論文の基準は、ベネフィット・ファインディング促進を含む介入研究を行っている英語論文とし、介入研究を実施する前の study protocolの論文は除外した。タイトルおよび要旨のスクリーニングから、介入研究ではない論文7本、study protocolの論文4本、ハンガリー語の論文1本を除外し、残る14論文に1文献を加えて、計15文献を検討の対象とした。さらに、ベネフィット・ファインディングやその近接概念の促進方法に関する書籍もレビューの対象として、介入方法や介入効果について知見を整理するとともに、ベネフィット・ファインディングを促進する介入方法について検討した。

(2) ベネフィット・ファインディングの関連要因の検討

研究者らは、過去に行った、精神疾患をもつ人々を対象としたベネフィット・ファインディングに関する質的研究および先行研究の知見をもとに、ベネフィット・ファインディングを評価する5件法・30項目から成る質問票を作成している。

本研究では、栃木県・茨城県内の医療機関のデイケア6施設および福祉施設16か所を対象施設として、精神疾患の診断を受けており、地域で生活している20歳以上の者を対象として、自記式調査票による調査を行った。調査は2014年8～9月に実施し、さらにその1年後に、初回調査への協力を得られた者を

対象として、同じ調査内容の自記式調査票による調査を再び行った。調査票には、ベネフィット・ファインディングを評価する質問票、デモグラフィック・データの他、首尾一貫感覚を評価する13項目版7件法版SOCスケール (Togari et al., 2008)、健康関連QOLを評価する日本語版SF-8(Fukuhara & Suzukamo, 2004)、不安・抑うつを評価するK6 (Furukawa et al., 2008)、希望を評価する日本語版 Herth Hope Index (HHI) (Hirano et al., 2007)等を含めた。調査は、研究者が所属していた研究機関の倫理審査委員会の承認を得て行った。

横断調査データを用いた分析では、ベネフィット・ファインディングの各項目と首尾一貫感覚との関連を、相関係数の算出により個々に検討した。また、その他の関連要因については、ベネフィット・ファインディングとの相関係数を算出し、相関が有意であった変数を独立変数、ベネフィット・ファインディングを従属変数とした重回帰分析を行った。さらに、縦断調査データにおいては、ベースライン時と1年後のベネフィット・ファインディングスコアを比較し、スコアの向上に寄与する変数との関連を分析することを計画した。

### (3) 日本語版 Recovery Attitude Questionnaire (RAQ)の信頼性・妥当性の検討

過去に行った以下の調査データより、尺度の信頼性・妥当性を検討した。

原著者(Borkin et al)の許諾を得て、研究チームにより、順翻訳、逆翻訳を含む手続きをふみ、Recovery Attitude Questionnaire (RAQ)(7項目版)の日本語版を作成した。関東地方の2か所の精神科病院、および東京都内の計56か所の精神科クリニック・社会復帰施設等において、精神保健サービスに携わる専門職者を対象に、日本語版RAQを含む自記式調査票による横断調査を2012年2~3月に実施した。調査票には、デモグラフィック・データの他、精神障害をもつ人に対する肯定的態度尺度(改訂版) (岩井, 野中, 2011)や、日本語版統合失調症に対する社会的距離尺度(牧田, 2006)等を含めた。調査は、研究者が所属していた研究機関の倫理審査委員会の承認を得て行った。

信頼性は内的整合性と再テスト信頼性を検討し、妥当性は因子的妥当性と構成概念妥当性を検討した。

## 4. 研究成果

(1) ベネフィット・ファインディング促進に関する先行研究の文献レビュー・介入プログラム作成に関する検討

対象となった論文をレビューした結果、介入は、がんや糖尿病などの患者や、骨髄移植

を受ける子どもやその親、介護を要する患者の家族、家族との死別を経験した者などを対象として行われていた。精神疾患をもつ人を対象として行われた研究は1つのみであった。

主な内容には、認知行動療法の理論に基づくストレスマネジメント、認知行動療法の理論に基づくポジティブな再評価のトレーニング、逆境の経験への意味づけ・逆境を経験したことによるポジティブな変化もしくは自身の感情についての作文による表出、イメージ療法、マッサージ・リラクゼーションなどがあり、複数の内容を含む介入プログラムが多くみられた。また、グループを対象としたセッションが多く行われていた他、個人セッションにより行われていたプログラムもあった。ベネフィット・ファインディングの促進や不安・抑うつの軽減などの効果がみられたとする研究がある一方で、ベネフィット・ファインディングを効果評価の指標に含まない研究や、有意な介入効果がみとめられなかった研究も報告されていた。先行研究のレビューからは、ベネフィット・ファインディングの促進に効果的な介入内容についての十分なエビデンスは蓄積されていないこと分かったが、書籍も含めたレビューにおいては、認知行動療法や、ポジティブ心理学の理論を用いた介入が有用である可能性が示唆された。

また、グループセッションによってピアサポートを得られやすくすることも、ベネフィット・ファインディングを促進する上で有用な可能性が示唆された。さらに、介入の効果評価としてベネフィット・ファインディングの指標を含めることが必要であると考えられた。

先行研究においては、ベネフィット・ファインディングやポジティブな心理的変容を高めるための介入をする際には、そのことがポジティブ思考の誤用にならないような配慮を要することや、逆境の経験そのものに焦点化しすぎないことなどの注意点が指摘されていることから、精神疾患をもつ人々のベネフィット・ファインディングを促進する介入プログラムを作成する上では、それらをふまえることが必要であると考えられた。

### (2) ベネフィット・ファインディングの関連要因の検討

ベースライン時調査では、計364名に調査の説明を行い、286名から調査票を回収した。そのうち無効回答者27名を除外した有効回答者262名の分析においては(有効回答の回収率:72.0%)、平均年齢は45.4歳(標準偏差 = 12.9)、男性が169名(65.3%)であった。また、最も多かった診断名は統合失調症で185名(70.6%)、続いてうつ病が23名(8.8%)、双極性障害が16名(6.1%)であった。平均罹病期間は16.2年(標準偏差 = 11.9)であった。

ベネフィット・ファインディングと首尾一貫感覚には高い相関があることが確認され

た。首尾一貫感覚の3因子「把握可能感」、「処理可能感」、「有意味感」のなかでも、特に「有意味感」がベネフィット・ファインディングの各項目と密接に関連することが明らかになった。

また、精神疾患をもつ人々のベネフィット・ファインディングには、生きる上での楽しみや支えを多くもっていること、心の支えになってくれる人の数、精神の病の先行きへの不安が少ないこと、不安や抑うつ症状が少ないことなどがベネフィット・ファインディングと有意に関連していた。

縦断調査においては、182名から有効回答を得て分析を行ったが、ベースライン時と1年後のベネフィット・ファインディングの合計スコアには有意差が認められなかった。このことから、精神疾患をもつ人々において、特別な介入を行わない状況下では、ベネフィット・ファインディングの経験やその度合いが1年間のなかで大きく変化することは少ない可能性が示唆された。

### (3) 日本語版 Recovery Attitude Questionnaire (RAQ)の信頼性・妥当性の検討

475名中、調査協力を得られた331名で、そのうち有効回答が得られたのは307名であった(有効回答の回収率:64.6%)。307名中、平均年齢は40.2歳(標準偏差=11.8)、男性は91名(29.6%)で、職種は看護職が最多で134名(43.3%)であった。再テスト信頼性は、13名のデータにより分析を行った。

分析の結果、7項目全体の内的整合性(Cronbach's alpha)は0.64、再テスト信頼性(ICC)は0.68であり、十分に高いといえる結果ではなかった。一方、妥当性については、2因子構造でモデルのあてはまりが良好であることが示され、それぞれの因子は「リカバリーは可能であり、信念を要すること」、「リカバリーは困難な道のりであり、人によって異なること」を意味すると解釈できた。また、関連する尺度との有意な相関が認められたことから、構成概念妥当性は良好であると考えられた。今後わが国の研究に用いるためには、さらに大規模な調査を行い、特に信頼性について確認することが必要であると考えられた。

本研究成果は論文としてまとめられ、オープンアクセスの国際学術雑誌に掲載された(Chiba et al., BMC Psychiatry, 2016)。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

- ① Chiba R, Umeda M, Goto K, Miyamoto Y, Yamaguchi S, Kawakami N. Psychometric properties of the Japanese version of the Recovery Attitudes Questionnaire (RAQ) among

mental health providers: a questionnaire survey. BMC Psychiatry, 16:32, 2016.

DOI: 10.1186/s12888-016-0740-x.

(査読あり)

[学会発表] (計5件)

- ① Chiba R, Miyamoto Y, Funakoshi, A, Yamazaki Y. Contributing factors on benefit finding among people with chronic mental illness: findings from a longitudinal study in Japan. International Society of Psychiatric-Mental Health Nurses 19th Annual Conference, 2017年3月8日~10日, Baltimore, USA.
- ② 千葉 理恵, 船越 明子, 宮本 有紀, 山崎 喜比古. 地域で生活する精神疾患をもつ人々のベネフィット・ファインディングの関連要因の検討: 横断調査から. 第36回日本看護科学学会学術集会, 2016年12月10日, 東京国際フォーラム(東京都千代田区).
- ③ 千葉 理恵, 山崎 喜比古, 船越 明子, 宮本 有紀. 精神疾患をもつ人々の首尾一貫感覚とベネフィット・ファインディングの関連: 横断調査. 第74回日本公衆衛生学会総会, 2016年10月28日, グランフロント大阪(大阪市).
- ④ 千葉 理恵, 山崎 喜比古, 宮本 有紀, 船越 明子. 精神疾患を経験した人々のベネフィット・ファインディング評価尺度の作成の試み. 第35回日本看護科学学会学術集会, 2015年12月6日, 広島市文化交流会館(広島市).
- ⑤ 千葉 理恵. 逆境を経験した人へのベネフィット・ファインディング促進の介入に関する文献検討. 第73回日本公衆衛生学会総会, 2014年11月7日, 栃木県総合文化センター(宇都宮市).

[図書] (計1件)

- ① 宅 香菜子 編. PTGの可能性と課題. (千葉 理恵, 第8章 ベネフィット・ファインディング: 精神疾患をもつ人々を対象とした研究をもとに. p.101-114) 金子書房, 2016.

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://researchmap.jp/crie/?lang=japanese>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千葉 理恵 (CHIBA, Rie)

兵庫県立大学・地域ケア開発研究所・准教授

研究者番号：50645075

(3) 研究協力者

宮本 有紀 (MIYAMOTO, Yuki)

(研究(2),(3))

山崎 喜比古 (YAMAZAKI, Yoshihiko)

(研究(2))

船越 明子 (FUNAKOSHI, Akiko)

(研究(2))

梅田 麻希 (UMEDA, Maki)

(研究(3))

後藤 恭平 (GOTO, Kyohei)

(研究(3))

山口 創生 (YAMAGUCHI, Sosei)

(研究(3))

川上 憲人 (KAWAKAMI, Noritoi)

(研究(3))